

序文

村上春樹(1949-)は、周知の通り、1979年に『風の歌を聴け』を発表し、文壇に初登場した。40年間、小説創作をし続けてきているため、村上春樹は現在、世界的に名をよく知られている日本人作家の一人となり、2010年代から10月になるたびに、ノーベル文学賞を受賞するかどうかで、世界のマスコミの注目を大いに浴びている。

村上春樹の海外への紹介だが、1985年8月に『新書月刊』に掲載された賴明珠訳の3つの短篇「1980年超級市場式的生活」、「街的幻影」、「鏡子裡的晚霞」が村上春樹作品として初めて台湾に紹介され、村上春樹作品初の海外進出として世界的記録を残している。また、台湾のロック界で代表的な歌手伍佰は好きな小説『ノルウェーの森』をイメージして、1997年に「ノルウェーの森」を作詞、作曲し、世界を風靡している。

そして、2011年8月に村上春樹ブームの最中、論者は「村上春樹研究室」を設置した。その成果を大学から認められて、3年後の2014年8月に淡江大学で世界初の唯一な「村上春樹研究センター」を立ち上げた。国境と民族を越えて受容されている村上春樹に関連した研究のグローバルな学術交流と研究成果を図り、語学、文学、教育学、文化人類学、社会学、経営学、翻訳学、心理学、比較文学、比較文化、文艺学などの様々な視野から、言わば、「村上春樹学」構築を目標に出来た研究センターである。それをを目指して本格的な学術活動を行い、年に一回の国

際シンポジウムを開催、年に一冊の研究叢書を刊行というペースで歩み続けている。

今まで開催した9回のシンポジウムを下記に掲げる。

- 1.「2012年第1回村上春樹国際シンポジウム」(2012.6.23 淡江大学にて)
- 2.「2013年第2回村上春樹国際シンポジウム」(メインテーマ「村上春樹文学における「通過儀礼」(initiation)」2013.5.5 淡江大学にて)
- 3.「2014年第3回村上春樹国際シンポジウム」(メインテーマ「村上春樹文学における「メディアム」(medium)」2014.6.21 淡江大学にて)
- 4.「2015年第4回村上春樹国際シンポジウム」(メインテーマ「村上春樹文学における「両義性」(pharmakon)」2015.7.25-27 日本北九州市国際会議場にて)
- 5.「2016年第5回村上春樹国際シンポジウム」(メインテーマ「村上春樹文学における「秩序」(order)」2016.5.28-29 淡江大学にて)
- 6.「2017年第6回村上春樹国際シンポジウム」(メインテーマ「村上春樹文学における「魅惑」(charm)」2017.7.8-9。日本同志社大学にて)
- 7.「2018年第7回村上春樹国際シンポジウム」(メインテーマ「村上春樹文学における「共鳴」(sympathy)」2018年5.26-27 淡江大学にて)
- 8.「2019年第8回村上春樹国際シンポジウム」(メインテーマ「村上春樹文学における「移動」(movement)」

2019年7.20-21 日本北海道大学にて)

- 9.「2020年第9回村上春樹国際シンポジウム」(メインテーマ「村上春樹文学における「命運」(fate)」2020年7.4-5 淡江大学にて)

村上春樹研究センター設立後、毎年行ってきた国際シンポジウムでの基調講演、研究発表(査読済み)を纏めて村上春樹叢書として刊行してきている。その刊行一覧は以下の通りである。

- 1.森正人監修、小森陽一・曾秋桂編集(2015)『村上春樹研究叢書第一輯村上春樹におけるメディアムー20世紀篇』淡江大学出版中心
- 2.森正人監修、小森陽一・曾秋桂編集(2015)『村上春樹研究叢書第二輯村上春樹におけるメディアムー21世紀篇』淡江大学出版中心
- 3.森正人監修、小森陽一・曾秋桂編集(2016)『村上春樹研究叢書第三輯村上春樹文学における「両義性」』淡江大学出版中心
- 4.沼野充義監修、曾秋桂編集(2017)『村上春樹研究叢書第四輯村上春樹文学における「秩序」』淡江大学出版中心
- 5.沼野充義監修、曾秋桂編集(2018)『村上春樹研究叢書第五輯村上春樹文学における「魅惑」』淡江大学出版中心
- 6.中村三春監修、曾秋桂編集(2019)『村上春樹研究叢書第六輯村上春樹文学における「共鳴」』淡江大学出版中心

7. 中村三春監修、曾秋桂編集(2020)『村上春樹研究叢書
第七輯村上春樹文学における「移動」』淡江大学出版
中心

村上春樹の生地でもなく、村上春樹が訪れたゆかりのある土地でもない台湾という国土で、村上春樹作品の国際的展開が始まったことは不思議な縁であると同時に運命でもあろうが、今は、正に村上春樹研究に村上春樹研究センターが花を咲かせようとしている。新型コロナウイルス感染症が現代文明を根本から脅かしている現在、新しい希望を探る道として、村上春樹文学という人類文化の精華の伝統を未来に向けて繋げていきたい気持ちが一層強まっている。

上述の新型コロナウイルス感染症による社会変動も本書の出版の契機となっている。本書は、2部により構成されている。第1部は、村上春樹文学の魅力を探ることを目標に設け、論述してきたものである。6章で組み立てられた第1部では、まず、第1章の台湾で行ってきた村上春樹受容や研究の流れと、第2章のMOOCSによる村上春樹の講義を皮切りに、村上春樹文学の魅力を探ることにする。そして、第3章では、作者、作品、読者の3者をめぐる村上春樹の見解を考察する。第4章以後の3章では、「風」、「共鳴」、「移動」の文学的装置を通して、処女作『風の歌を聴け』、最新長篇小説『騎士団長殺し』を実例としてその持つ魅力を分析、考察する。

それに対して、第2部は、村上春樹文学と震災との関係を探ることを目標に設け、論述しているものである。というのは、

阪神淡路大震災(1995)、東日本大震災(2011)のような大災厄が起きた時に、知名度の高い村上春樹に対して傷付けられた国民を慰めるような期待が社会から寄せられたからである。そこで、大災厄から受けたトラウマの文学的装置を通して、震災に関わりのある作品について考察した論究を集めた4章で第2部を作ることにしたのである。まず、阪神淡路大震災に触発され、震災後5年目の2000年に発表した『神の子どもたちはみな踊る』を分析対象に、第1章では斎藤環がかつて「トラウマ文学が90年代後半から人気を集めた」¹と言ったトラウマ文学を重点に考察する。第2章では、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(2013)、『女のいない男たち』(2014)を分析対象に加え、同じくトラウマを重点に考察する。第3章では、阪神淡路大震災(1995)と東日本大震災(2011)の大災厄に跨る創作群として、小説創作と小説以外の創作の2種類に分け、震災と原発に対する村上春樹の真意を究明する。第4章では東日本大震災(2011)が初めて触れられた『騎士団長殺し』を分析対象に、東日本大震災の打撃を受けた日本社会がどのように発展すべきか、という村上春樹の思いを探求する。

以上のように、第1部、第2部で成り立った本書では、村上春樹文学の魅力とその文学的装置を考察しながら、さらに、村上春樹が作品中で継続して取り上げている震災との関係を探る試みである。微力ながら村上春樹文学研究に貢献し、一人でも多くの村上春樹文学愛読者が増えれば、この上もない喜びである。

¹ 斎藤環(2008)『文学の断層セカイ・震災・キャラクター』朝日新聞社 P253